

霧多布湿原の保全とまちづくり

誌名	ランドスケープ研究
ISSN	13408984
著者	阪野, 真人
巻/号	73巻2号
掲載ページ	p. 116-118
発行年月	2009年8月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



霧多布湿原の保全とまちづくり

Conservation of Kiritappu Wetland and Community Development

阪野 真人*

Masato BANNO

1. はじめに

協働という言葉は最近になって本当によく聞くようになった。私達の活動は25年ほど前から始まったが、その頃からの協働を無意識のうちに理解し、大切にしてきたように思う。それぞれの立場を理解し主体的に取り組むことで、世の中の既成概念を変える活動に取り組むことができる。

私達が活動を行っている浜中町・霧多布湿原には多くの課題が今も残されている。それらの課題を解決するために、市民が中心となって始まった私たちの取り組みを紹介する。

2. 霧多布湿原の概要

日本には様々な湿地がある。国内最大の湖である琵琶湖や愛知県の藤前干潟などの有名な場所から、水田やため池など身近な水辺も湿地に含まれる。

北海道は冷涼な気候であるため、植物が腐りにくく、分解されないものが体積して形成される泥炭湿地が多い。私達のフィールドである霧多布湿原もそれにあたる。この泥炭の層は一年で1mmという非常にゆっくりしたペースで形成されるが、霧多布湿原ではこの泥炭が3メートルほどの層を形成しているため、気の遠くなるような年月を経て今の景観が成り立っているといえる。

霧多布(きりたっぶ)と読み、もともとの語源となって



いるアイヌ語では「ヨシを刈る場所」といった意味になるが、北海道東部、太平洋側の海で発生する海霧(かいむ)のため、字のごとくたいへん霧の多い地域である。

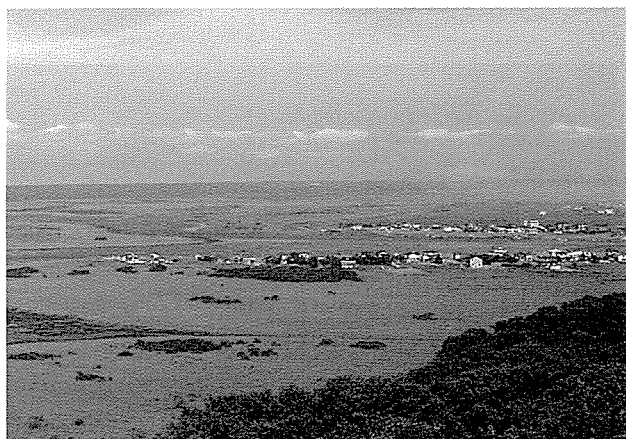
国内では三番目に大きい3168haの面積を持ち、別名「花の湿原」と呼ばれ、短い夏を競うように花が咲き誇る。5月のミズバショウに始まり、6月のワタスゲ、7月のエゾカンゾウ、8月のノハナショウブなど、全国から毎年多くの旅行者が花の群落見たさに霧多布湿原を訪れる。

3. 霧多布湿原の課題

海外の研究者が霧多布湿原を訪れた際に「人の生活圏が近いにも関わらず、これだけの自然度を維持しているのは奇跡に近い」と言ったことがある。湿原のすぐ脇に民家が立ち並び、裏庭が湿原といった距離感に人の生活と湿原が存在する。

国立公園や天然記念物など全国的にも保護されている湿地は少なく、霧多布湿原も例外ではない。霧多布湿原は総面積の約3分の1にあたる1200haほどが民有地となっており、常に開発と隣り合わせの状態にある。花の群生の中に、「売地」の看板を見つかることも出来る。

湿原は文字通り水分が多く湿った土地であるため、人間生活には向かない土地である。そのため、宅地や昆布を干す場所を作るために埋め立てられ、また時にはゴミ捨て場



*NPO法人霧多布湿原トラスト

のような扱いを受けてきた。今でもゴミ拾いをすれば、古タイヤや家電製品一式が出てくる。湿原のことを地元の人々は谷地（やち）と呼ぶが、この言葉には「どうしようもない場所」といった意味合いも含まれている。

4. ナショナルトラストの始まり

子どもの頃湿原の中で遊んだ、湿原に生えている植物の実を食べた、最近の子どもは湿原で遊ばないよな、そんなことを一軒の喫茶店に集まる数名が話しているうちに「霧多布湿原に惚れた会」が結成された。それが今から25年ほど前、現在のNPO活動の原点である。最初は霧多布湿原を楽しむ会であったが、その後「霧多布湿原ファンクラブ」へと形態を変え、湿原民有地を借りるという、その当時は珍しい保全活動を始めた。反対運動ではなく、賛成運動をしようというのがコンセプトで、湿原開発反対ではなく、湿原を残すの賛成。これが現在の活動にも続く活動理念である。反対運動は、多くの人々の共感を得にくいし、長く続けるのに体力もいる。

2000年には「NPO法人霧多布湿原トラスト」が誕生し、さらに発展的な湿原民有地の買い取りを行っている。トラストとは、イギリスの代表的な市民活動であるナショナルトラストの略で、市民が主体となって貴重な自然や文化遺産を保存する活動のことである。イギリスのナショナルトラストは職員が4000人、会員が300万人という巨大な組織であるが、私たちの活動もこれまでに全国の様々な地域、団体の方々の支えをいただきながら活動を続けてきた。いくら感謝しても仕切れないくらいである。

全国の個人会員、企業の寄付、事業費を得ながら、これまでに583haの民有地の買い取りを終えている。

これらの土地はナショナルトラスト保全地として保護されている。

5. ファンを増やそう

霧多布湿原のある浜中町は、湿原や森林部を中心に酪農

地帯と漁業地帯に分かれる。酪農地帯では、ハーゲンダッツの原料に使用される高品質、高タンパクの牛乳が生産されている。漁業地帯では、天然昆布の水揚げ量が全国で一位になったこともあるほど、良質な昆布が多く水揚げされる。浜中町の人口の大部分はこれらの一次産業を生業としている人々である。

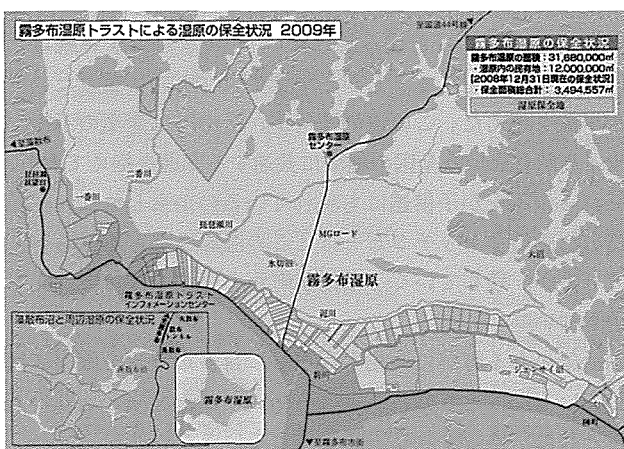
酪農では、霧多布湿原の雄大なイメージを商品戦略に用いて、環境に優しいというブランドイメージが作られている。漁業では、霧多布湿原の河口部は他の漁場と比べて昆布の生育状況が良く、また魚介類も大型で美味しいものが採れることから、湿原の栄養がよい影響を与えてといわれている。霧多布湿原と2つの産業は切っても切れない関係にあるのである。

私たちの活動には三本の柱がある。「湿原の買い取り」「湿原の復元、調査研究」「ファンづくり」である。「ファンづくり」とはつまり湿原や私達の町のことを好きになってもらいたいということであるが、それは地域の人々に向けて自分達の町の魅力を見直そうという呼びかけでもあり、町外の人には応援団になってもらいたいということである。

これらのファンづくりは、体験学習、エコツアー、物販、広報など多岐に渡るが、ここでは体験学習とエコツアーの2点について紹介したい。

地域の子供達への環境教育として、自然や産業をテーマにした体験学習を行っている。年間約80回のプログラムを町内の子供達を対象に開催しており、教育委員会や学校と連携して活動を行っている。

霧多布湿原はもちろんのこと、学校周辺の自然や産業をテーマにした活動を行っており、そのプログラムは多岐に渡る。子供達にとって、霧多布湿原はすぐ近くに存在するが、親しみのある自然ではない。国内有数の花の湿原が身近に存在する凄みを、当然ながら子供達は実感する機会は少ない。そこで体験学習が活きてくる。子供達を湿原に連れ出し、長ぐつを履いて湿原に埋まったり、湿原の花を調



べたり、川で魚を釣ったりする。時には地域のおじいちゃんに先生役をお願いすることや、海外からの研修生との合同プログラムなども行うこともある。子供達は、色んな刺激を受けながら当たり前の日常や自然を見直していく。面白いことに、町内の小中学生を対象にしたアンケートにおいて、「どんな町になって欲しいですか」という質問事項では、様々な項目の中でも「自然豊かで環境が良い町」が、小中学生共に一位という結果が出た。湿原の保全を掲げる私達にとって、頼もしく嬉しい限りである。

町外から訪れる旅行者へは、魅力を伝えるエコツアーも開催している。湿原散策から、漁師さんに魚さばきを教えてもらうツアー、無人島へ行くなど内容も様々である。



私達はガイド業者ではなく、いわば自然保護やまちづくりの団体に分類されるが、自然保護やまちづくりの手段としてエコツアーを開催していることが重要なのである。得た収入は、湿原民有地の買い取りや子供達への体験学習、地元の産業の活性化などに活用される。もちろん湿原を壊してまでツアーを行うのは本末転倒であるし、地域に負荷を掛けてまで開催するのも本意ではない。エコツアーで町外か



らお金を得ることで、湿原が保全されていき、町にもっと活気が現われる。そこまでのしっかりした仕組みを作りたい。

6. この湿原を子どもたちへ

一件の喫茶店から始まった活動は、個人会員約 2600 人、法人会員約 170 の組織へと成長を続けている。購入した土地の管理計画、地域の人材育成、事業の拡大など、組織としてはまだ課題は山積みである。私達の活動は、まだ将来の展望を模索する段階であるが、最近になって、励みになることが 2 つある。

一つは地元の高校生を当 NPO で雇用できたこと。子供達への体験学習でのアプローチは 20 年ほど続けてきたが、嬉しい形で実を結んだといえる。理事長いわくこの雇用こそが長年の夢で、地域に認められるための大事な一つの要素でもある。

もう一つは、湿原の価値が見直され始めていること。花が美しく観光資源になることはもちろんであるが、実は湿原が私達を守ってくれていることも分かってきた。

例えば、湿原にはたくさんの水が含まれている。それらは時にダムとなり、河口部の集落を守ってくれていた。また、その大量の水が気候の調整をしてくれているらしい。夏の気温を冬まで蓄えてくれるカイロのような役割を担っているというのである。最近話題の二酸化炭素も、泥炭の蓄積している CO₂ は森林より単位面積あたりでははるかに多いといわれ、地球温暖化防止にも大きく貢献している。

ゴミを捨てられたり埋め立てられたりしながらも、これまで私達人間を守ってくれてきたのだと考えると、今度は私達が守る番なのだと思えてならない。まだまだできることはたくさんあると、逆に霧多布湿原に奮い立たせてもらった気がする。子供達に湿原のことを伝える環境教育プログラムでは、湿原と友達になろうと投げかける。友達になるにはまず相手のことを知らなくてはならない。私達が知らない湿原の魅力はまだたくさんあるのだろう。

先にあげた小中学生へのアンケートには、「浜中町にすみ続けたいですか」という項目もあった。小学生はこの問いに対して「ずっと住み続けたい」「できればすみ続けたい」が半数を超える。しかし中学生は「町内に移りたい」が半数を超えた。この違いは何か。浜中町は産業の不振、少子高齢化という全国の地域に共通する課題を抱えており、それらの不安が子供達にも現れているのかもしれない。私達の活動のキャッチコピーは「この湿原をこどもたちへ」であるが、残していく子供達が町からいなくなるとは元も子もない。

活気のある町がこの先も存在し、霧多布湿原を確実に残していくにはどうしたらよいのか。霧多布湿原と地域の人達と共に、ゆっくりと答えを出していきたい。